

『新京図書館月報』からみる 中日文人の心象風景

李 青

はじめに

本論は「満洲国」時代に南満洲鉄道（以下略して「満鉄」という）の附属図書館の館報の一つ『新京図書館月報』をテキストとし、当時ライブラリアンたちが記録した日常を通じて、「満洲国」文壇の様子、活躍していた日中文人たちに焦点を当てながら、「満洲国」の実態に文学の視覚から迫り、中日文人の心象風景を解明していきたい。

日露戦争後に日本の勝利によって、ロシア側の権益を獲得した。得られた権益を確保するために、南満洲鉄道株式会社を1906年に立ち上げた。国策のあらゆる重任を一身に担う南満洲鉄道株式会社は文字通りの鉄道事業の他、鉄鋼、鉱山、保険、投資事業なども手がけていた。さらに、調査活動にも精を出し、文化事業においては、相次いで「満洲国」の各地に図書館を建設した。

筆者は「満洲国」の首都である新京（現在の長春）にある新京図書館から出していた『新京図書館月報』の読解を通して、いくつかの問題を考察してみたい。

一、『新京図書館月報』について

1 満鉄の図書館建設と新京図書館

1906年に日本は大連で「満鉄」を創設し、満鉄付属地への建設にも本腰を入れた。文化面においては、満鉄沿線に住む社員や日本人滞在者に精神的な糧を提供するために図書閲覧場を設置した。

『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』の中で植民地に図書館を設置する理由について以下のように纏めている¹。

第一に、植民政策を推進するのに必要な、その土地の政治・経済・社会・文化・科学技術などの情報資料を集めて、政府や軍が使えるように組織するためである。

第二に、植民地の日本人社会で暮らす居留日本人を対象に、学校教育を補ったり、植民政策を周知させるためである。

第三に、侵略された国の民衆を日本人化する政策、いわゆる皇民化政策に役立てるためである。

こうした植民地図書館は、本国に存在していた図書館以上に活動は活発で、国内からは国立図書館長クラスの人々が赴任して、図書館経営や整理技術の研究や各種の付帯事業は国内を凌ぐほどの活動を展開していた。

満鉄図書館のスタートは大連で満鉄調査部図書室の建設から少しずつ始まったと言えよう。1912年10月に、大連市東公園町で満鉄図書館の建設を始めた。1年半後の1914年1月に書庫と部分工事が終わり、図書の閲覧が始まった。1918年満鉄図書館は正式に創立し、「南満洲鉄道株式会社大連図書館」と名付けた。同年11月に第二次図書館工事、1926年から28年にかけて第三次図書館工事が竣工、満鉄図書館は近代的な文化施設として、稼働することになった。

満鉄大連図書館は当時世界的に誇るレベルを有する図書館だったと言われていた。敗戦時には40万冊の蔵書があった。特殊な蔵書があることは特色の一つであろう。例えば、大谷光瑞が丹念に収集した価値のある本を満鉄大連図書館に寄贈し、図書館は蔵書のレベルをアップさせた。この他に中国地方志、中国地図、古籍、欧文の貴重な資料などにも特色があった。図書の文献分類は先進的な十進分類法を使ったことも図書の管理にも役立った。館報として『書香』が有名である。満鉄大連図書館についての研究に欠かせない貴重な資料である。

満鉄の図書館建設は本社の大連を皮切りに、次から次へと満鉄付属地に広がり、徐々に数を増やし、規模も大きくなった。

「満洲国」のもっとも北に位置する哈爾濱にある満鉄哈爾濱図書館に触れてみたい。満鉄は1923年5月に哈爾濱の満鉄付属地に満鉄図書館を立ち上げた。一方、もともとあった中東鉄路中央図書館を日本が「満洲国」の名義で1935年3月に買収し、「哈爾濱鉄路中央図書館」と称した。同年5月に、「哈爾濱鉄路図書館」に改名した。以後、1936年3月に満鉄哈爾濱図書館は、哈爾濱鉄路図

書館と合併し、「満鉄哈爾濱図書館埠頭区分館」と改名した。

満鉄哈爾濱図書館は中東鉄道中央図書館から継承し、さらに蔵書の幅と種類を拡大した。ロシア、英国、ドイツ、フランスなどの文献を精力的に蒐集した。図書館はロシア、シベリア、アジア社会科学、応用科学、歴史地理関連の書物を蒐集すると同時に、東北地方の歴史、地理、経済、資源、人文の文献も重点的に蒐集した。総じて見れば、ロシア語の文献と「北満」の所蔵文献は満鉄哈爾濱図書館の特色の一つである。

館報としては、『北窓』がある。1939年創刊した『北窓』は総合的な文化雑誌である。『北窓』の内容は非常に豊富であり、多くの文化人と有名人が投稿していた。満鉄調査部、満鉄弘報課、建国大学、南満洲工業専門学校や日本国内の学者の名前がよく見られる。ロシア関係の論文などが多数あった。東北地方の政治、歴史、経済、地理、文化、宗教、民俗に対する研究も館報『北窓』に盛んに行われた。

他に満鉄三大図書館としては、奉天（現在の瀋陽）満鉄図書館がある。館報には『収書月報』があり、図書館の様々な出来事、文化事情などが記されている。

満鉄は以上の三大図書館以外に、付属地を中心に他に図書館を計31カ所作った。次に、「満洲国」の首都である満鉄関係の新京図書館を舞台に、活躍していた日中の文化人の種々相、彼等の文学、彼等の心の軌跡を追ってみたい。図書館報に記載された様々な記事を通じて、「満洲国」で本当の姿を探りたい。

1910年に長春に「満鉄図書閲覧場」ができた。これが新京図書館の前身であり、現在の長春図書館である。1917年「満鉄長春簡易図書館」と改名し、1922年「簡易」という二文字を取り、「満鉄長春図書館」と名を改めた。1932年に満洲国が成立し、国都を長春に置き、名前を新京と改めたため、同年11月に、図書館の名を「満鉄新京図書館」と変更した。翌年の1933年に新京は特別市となり、図書館は「新京特別市図書館」と名乗るようになったが、管轄権は依然として満鉄にあった。

1937年に「満洲国」内に治外法権が撤廃され、満鉄付属地の権力を国家に引き渡した。

新京特別市図書館は新京特別市の管轄になり、1938年に新京館と合併し、「新京特別市立図書館」として、スタートした。

本論では復刻版の『新京図書館月報』の内容に基づき、諸問題に当たってい

きたい。

2 『新京図書館月報』に見られる特色

本論は2009年に文圃閣より復刻された『新京図書館月報』をテキストとする。『新京図書館月報』復刻版は三巻に分かれる。第一巻は12号(1937年8月)～42号(1940年6月)であるが、ただし、17号～23号は欠号である。第二巻は43号(1940年7月)～59号(1942年4月)である。第三巻は60号(1942年5月)～76号(1944年1・2月)であるが、ただし、66号5～8/13～16頁、75号は欠号である。

第一に毎月号に「増加図書目録」がある。図書館の納書リストは項目に分かれ、毎月どのような本が納入されていたのか、本の出版傾向などが分かる。

第二に図書館司書の活躍である。例えば、坂井艶司はその中の一人である。彼は1939年に大連図書館から転入し、他へ転出するまでの間、館報の編集を担当していた。新京図書館在職中に文学に関する書評や関連掲載が多かった。これは彼と彼の同僚たちの文学志向が大きく関わっていたと言えよう。坂井艶司自身は文学的な素養が高く、評論家としても詩人としても活躍していた。『作文』の同人としても名高い。今後は坂井艶司の文章を読むことによって、新たな発見が期待できる。

第三に毎月の館報に必ず「筆者紹介」欄を設けており、執筆者の紹介から所属が分かる。図書館はどのような社会的地位の人に注目し、どのような肩書きを持っている人が投稿するのか、図書館が彼らを起用することによって、国家の使命を担う国都図書館としての性質を垣間見ることができよう。この他に、図書館関係者の人事異動(転入転出)は随時館報の「編者後記」の中で公表されるため、どの時期に誰が館報に関わったのかがよく分かる。実際には、館報の特異性も直接編集に携わった図書館員の志向によって、微妙な変化が感じ取られた。

二、『新京図書館月報』に書かれた日本文人の活躍

1 『新京図書館月報』にまつわるライブラリアンたちの活躍

新京図書館に関わったことのあるライブラリアンたちは実に多い。実際に図書館員のなかには坂井艶司のように自身が文筆家、詩人のケースもある。特に『作文』派に所属する文人達の活躍は注目すべきである。新京図書館に勤めていた図書館員は、復刻版の足かけ5年間分(欠号を除く)から、20数人の名前が

確認できた。

まずここで時間順に館報に名前のあった図書館員の名前を記しておく。

木下助男（1933年4月～1937年11月、館長）、大野澤緑郎（ロシア語が堪能）、布村一男、山崎末次郎（1937年12月～1940年、館長）松川幹生（1939年8月からハルピン市立図書館へ転任）、加藤忍、三島雪男、向井章、免田造地、田中登（1939年10月以後転出）、田中生、菊池弘美、彌吉生、坂井艶司、石龍子、津村政雄、大島喜平、肥田豊彦（1940年辞任）、坂井生、窪川稲子、相良貢、神戸悌、野村正良、三島信子、である。

図書館員は本を相手にしており一見して地味に感じるが、業務内容からみると、相当量の知識を有しなければならないし、世相を読みこなした上、書評、評論なども執筆していた。以下はライブラリアンたちが館報に書きたいいくつかのコラムを拾ってみたい。

まず、「閲覧室点描」の内容が面白い。そこにライブラリアンたちが見た日常の図書館、彼らの喜怒哀楽の一端、当時の世相も覗いてみることができる。

29号（1939年1月）に松川幹生が「閲覧室点描（満洲一旗組之巻）」（109頁）を書いた。閲覧者と出納手とのホットな話題である。青年達が図書館にやってくるエピソードの紹介を通じて、「満洲国」建国後に「満洲国」に憧れて、押し寄せてきた青年達の成功と彷徨を若者の閲覧者を通じて現しているのである。

次は30号（1939年2月）に相良貢が「閲覧室点描—婦人の巻一」（119頁）を書いた。「満洲」に渡った女性の勉学意欲や図書館利用が如何なる状況だったのかを理解するのは、この一編が特別面白い。相良貢の紹介によると、「20人に1人の婦人閲覧者」という具合であり、「この図書館には主婦らしい閲覧者は稀だ。主に職業婦人と令嬢である。若い婦人は大抵自分で本を探し、また出納係の者に尋ねるにしても、四邊の者が顔を上げるような大聲は出さぬ。読む本も探し易い文学書だから探すに困ることもない」と述べている。これらインテリ女性はどのような書物に興味を持ったのだろうか。相良貢は続けてこう描写している。人気があったのは「島木健作の『生活の探求』とか有名な『大地』それから丹羽文雄・横光利一の小説、もう少し上位になると、チエホフ、ドストイェフスキイの類である」。インテリ婦人達は性格的に慎ましく、読書の内容も知的だったようだ。図書館では婦人のために洋裁や家事、育児の書物を用意していたようであるが、求める人の少なさに図書館員も不思議に思っている

ようである。日々の観察から「新京での婦人の読物は、婦人の生活に直接必要な書籍より、趣味による小説などが多い譯である」と結論を出している。少ない女性の読者に相良貢が「まず本を手にとって呉」と呼びかけた。恐らくこれはすべてのライブラリアンたちの願いでもあるだろう。

相良貢は31号（1939年3月）にも「閲覧室点描 学生の巻き……」（137頁）を書いている。年齢や学年については記載はなかったのであるが、「少年達」という言葉や借りた本の種類から推測すると、描写対象は中学生ではないかと推察できる。

図書館員という立場から坂井生が第37号（1939年10・11月217頁）の「あとがき」に図書館員のありかたについて述べている。彼は図書館員は「単なる図書の出し入れ屋ではない。最も純粋な社会的学徒であり、行動に於いては消極的ながらも、精神に於いてはより積極的なものである。〈中略〉飽くまでも図書館員は、図書館員であることを第一義とし官吏非官吏の問題は第二の問題とすべきであるのは当然なことと云わねばならない。図書館員の純粋性を、もっとも尊重する。図書館員は、万国共通の精神が在る筈である」と言う。

もう一つ筆者の目に止まったコラム「さんしょうげん」は面白い。館報のコラムは特に決まりごとがあったわけではないようである。だいたい数回続いてから、違うコラムに変わっている。「さんしょうげん」はシリーズであり、館員達のつぶやきを通じて、日々の本や雑誌に対する素直な感想、文壇の動向、時事評論など……ざっくばらんに書きたいことを些細なことでも気軽に書いている。狭いスペースであるが、背伸びしているライブラリアンたちの姿を浮かび上がらせている。文壇動向に対するつぶやきはかなり辛口の部分があり、彼等の洞察力の鋭さを物語っている。

第28号（1938年12月104頁）では図書館員の田中生が創刊したばかりの『満洲浪漫』について、ユーモアを交えながら、特別要望とも取れるような発言をしている。「“満洲浪漫”が創刊された。誠に結構なことである。望むらくは只——高層ビルに閉籠って、土塀に眼を蔽うことのなからんよう。銀座の柳を新京に植替えるのみに終ることのなからんよう」と。要するに、「満洲」大地に根ざすような内容を持って、一般読者に親しみを持ってもらえるような文学にしてほしいという要望ではないだろうか。

第30号（1939年2月121頁）に日本内地文壇に現れた「大陸文学の誕生」の表現

に対して、「大陸の文学は大陸で……そう云う主張は満洲文人達のそれと一致してある。土地の文人たちよ、主張はこの位にして良からう。〈土に生えた文学〉の創造にかかろうじゃないか」とあり、まるで「満洲国」文学の独自性を強調しているように見受けられる。

なお、内地人（日本国内の人）の大陸への興味本位の旅行に対して、「つまり単なるエキゾティズムのレポートには眉をしかめさせられる。大名旅行はもうお断り——と言えないものか」と批判している。

「自分の小説の批評を掲げた新聞記事を切り抜いた紳士（新京では有名な作家だが）」が館員に発見され、平謝りする醜態を暴露している。モラルの問題が問われている一場面であろう。

第31号（1939年3月137頁）には純文学を掲げている同人雑誌『満洲浪漫』第二輯に発表された「満洲の受胎」（工清定）に対する厳しい指摘が見える。「純文学的な香りからほど遠い大衆文学の一頁でしかない。満洲浪漫よ如何に借り物でも、あんな衣裳は着ぬがよい」と批判している。

他に新京の本屋の怠慢さ、「時流本ばかりを高々と積みあげて、知的な本の買い込み方一つ知らぬ」ところの指摘はライブラリアンの職業習慣からきた鋭さ故に、批判していると思われる。

2 『新京図書館月報』に関係する文学者たちの活躍

『新京図書館月報』には多くの文人が関わった。筆者は二人の文学者に注目したい。一人は坂井艶司であり、彼は同人誌『作文』²の同人として、詩人としても有名であるが、もう一つの身分は新京図書館司書だった。「満洲国」時代に大連と新京で活躍していた。もう一人注目に値する文学者は大内隆雄（本名、山口慎一。1907年～1980年）である。大内隆雄が『新京図書館月報』に投稿していた時期には『新京日々新聞』社に勤めており、『満洲浪漫』³の同人であった。『原野』（三和書房、1939年9月）で一躍有名になり、名を知られるようになった。

坂井艶司が1939年に大連作文社より詩集『崖っぶちの歌』を発表し、一躍著名な詩人として知られるようになった。一ライブラリアンとしても、館報の編集に携わりながら、様々な評論を館報で披露した。坂井艶司が館報における活動を見てみたいと思う。一国の首都にある図書館の司書が書いた評論は単なる個人の思想を表すばかりではなく、国の文芸政策の動向も読み取ることができ

るからである。

坂井艶司は第35号(1939年2月119頁)に「私の書庫」と題して、三年足らずの図書館生活を振り返っている。自分のことを「私は、ここの図書館にとっては、不当な通行人であり、盗人である」と形容し、本や仕事をこよなく愛していると述べている。以後の館報に坂井艶司の名前がしばしば登場し、書評、評論、コラム編集などの多彩な文芸活動をしている。文学者でもある彼はどのように「満洲文化」を考えているのか、第32号(1939年4月)に発表された「選ばれた人々—満洲文化小論—」(151頁)をみてみよう。

この論説は「満洲文化」は如何なるものなのか、どう解釈すべきか、「満洲文化」をどう発展させるか、などの問題を取り上げている。

坂井艶司は論のなかで「支那事変(1937年7月7日、日中全面戦争勃発)以後にも多くの人々が渡満した。新京は、所謂〈選ばれたる人〉の溢るる巷と化しつつある」と、「満洲国」の首都「新京」に来た日本人は選ばれた人だと定義した。当時は「満洲国」の理念として「五族協和 日満同心同徳」などを宣伝していた。日本国内でも大陸への憧れ、植民地の満洲に行って新天地を切り開くことが盛んであった。つまり、渡満する者は国の使命に携わり、使命感を持たなければならなかった。「ただ選ばれたる知性人が、その己が存在価値の尊さを認識する以前に、己が存在理由の歴史的必然性に就て、その認識を深めることを忘れてはならないである」と新京に来ている日本人達に「満洲文化」を築き上げるにはまず自覚を持って提起している。

坂井艶司の解釈する「満洲文化」というのは、「僕一個人の、或は二三の意を同じくする人々の叫びではなく、満洲在住の幾万の人々の心からなる思惟によって生まれた言葉である」。彼は当時の東北に君臨していた張作霖の暗黒政治を批判し、張作霖を暗殺した「満州事変」(1931年9月18日)を積極的に評価した。「満洲文化」との関わりについて、彼は「昭和6年の満洲事変こそは、今日の満洲文化を要望させきづかせしむる一大祭典であったとも思われるのである」と言いつつ、「事変の成果に就て最も重要視すべきものは、満鉄の偉大なる献身的努力である」と満鉄の「満洲国」に貢献したことを称えた。

坂井艶司が最後に「満洲文化」について出した結論は、「来満した幾人もの人々〈選ばれたる人々〉のもつ精神は、日本精神である。文化は日本文化である。勿ち、かつての大和民族が建国当初、支那文化の影響によって生長した如

く満洲文化は、日本文化、日本精神によってはぐくまれ、建設さるゝ事に敢えて不思議は無かろうと思うのである」。

坂井艶司の論点は如何にも時局を意識する考え方であろう。あくまでも支配者の「満洲国」の建設における指針に沿った論点と言えよう。「満洲文化」は「日本精神」、「日本文化」という論理で推進するならば、現地の中国伝統文化を完全に無視してしまうという結果になる。

第36号（1939年8・9月200頁）にも「満洲文化論—序章—」を発表した。前回の論点とほぼ同じ論点を繰り返していたが、語気は以前よりまして激しくなつたと感じられる。彼は「満洲文化」を形成する唯一の歴史根拠を三段階にして論じている。つまり、「満洲事変」前から事変後まで、「満洲事変」より「支那事変」まで、「支那事変」から1939年までである。

一方、大内隆雄は新聞記者を務めながら、中国人の書いた文学作品を精力的に翻訳した。「満洲国」で中国人による文学の紹介が少ない中で、大内隆雄の仕事は際立ったものである。

大内隆雄は「満洲文壇」で日本と中国両国文人の交流における架け橋として有名である。あまり広く知られていない「満人」文人の活躍ぶりは、大内隆雄の紹介と翻訳を通じて、在満の日本人にも認知されるようになったばかりでなく、翻訳書は日本本土まで（『原野』など）広まり、知られるようになった。

「満洲国」内で活躍していた「満人」作家について、大内隆雄は三編著した。第32号（1939年4月150頁）に発表された「満人作家・その他」、その二ヶ月後に「〈芸文志〉第1輯について」（35号1939年7月187頁）を、第38号（1940年1月225頁）には「満系の文学回顧」を発表している。

大内隆雄が論じた「満人」文学について筆者は以前論じたことがあるので、ここで少し引用したい。

彼は冒頭に中国文学者古丁の言葉を引用し、「満人作家の悉くが、官吏、会社員、学校教師等の何れかなのである。この事は満洲文学の幼なさを語る材料として語られがちである。そしてそれも事実には違いない」と古丁の言い分を肯定した。つまり当時の中国人による文学は「働きつつ書く一勤労者の文学である」ということである。大内隆雄はプロの文学者がいない満洲文学の弱みを指摘しながらも、「私は少し違った考え方を持つようになって来た。

この職業作家がいないということが、満州文学の一つの強味を示すものとなってもよいではないか。在満日本人の場合にも言えることでもある」と持論を展開している。この理由として、「仕事を持っているが故に彼はこの社会の生産的な面と密接な関係を持続することが出来るのである。彼はその生活をそのためにこそいきいきと描き出し得る筈である」と述べている。

大内隆雄は中国文学者の文学への理解について、「必要なことは彼等の作品を読むことではないか。それこそが満人作家について知る最も正しい道ではないか」と述べ、さらに言葉の壁を越えなければならないことについては、「支那文を解した人は翻訳に頼らねばならない。ところが、そういう翻訳は数少ない。——私は一層奮闘せざるを得ないわけである」と自ら中国語による文学作品の翻訳を広める決意を表し、近く東京の三和書房から満人9作家の作品12篇を集めた『原野』を出版することを披露したのであった。

「満人」作家が自分たちの同人誌『芸文志』第1輯を出したときに、大内隆雄はいち早くエールを送った。彼は35号に「〈芸文志〉第1輯について」を寄稿し、積極的に評価した。

中国語の純文学雑誌『明明』（1936年—1937年）が停刊してから、「満州文壇」において、中国語の文芸誌はなく、「甚だ寂しさが感ぜられ」と大内隆雄は当時の状況を振り返っている。このような凋落した状況の下で純粹なる中国人の文芸誌『芸文志』が1939年6月に誕生した。紹介によると、『芸文志』ポスターの文言には「満州文化の宝庫、新京文芸のサロン」とあり、大内はこのフレーズを「〈芸文志〉の持つ色彩なり、方向なりをうまく表現していると言えよう」と言っている。雑誌『芸文志』に集まる文学者たちは大部分が政府機関に勤めながら、文学を志す熱血青年だった。中でもリーダー的な存在をしていたのが古丁だった。彼は「満州国」内で中国文学者としてもっとも文学の業績が多い一人である。日本語に堪能なため、日本人文人との関わりが深く、政府が招集する各会合にもたびたび顔を出し、中国人の中で為政者と日本人と最も近いと言われていた。文芸誌『芸文志』に集まった同人には古丁をはじめ、他に爵青、辛嘉、少虬、孟原、疑遲、非斯、外文などがある。「満州文壇」では、『芸文志』同人のことを「芸文志派」と呼んでいる。

大内隆雄の紹介によると、雑誌の上梓は「〈芸文志〉は不定期刊行物で、芸文

志事務会から発行される。芸文に関する創作及び紹介等を掲載することを以て目的としている。(中略) 発行の実務は月刊満州社であるという。雑誌が順調に出版できるのは出版界の大物の支援があることは、月刊満州社社長の城島舟礼を監理長として、大内隆雄、杉村勇造などが参与していることからわかる。

『芸文志』の特質を、大内隆雄は「第一にはそれが全く満人文学者の創意によってはじめられたものである点にあらう。第二には特定の主張などを持たず。ただ文化文芸のために創作し評論し研究するという真摯さのみを共通としている。包括的な、包容力ある刊行物であることである。第三には、この刊行物では、その発行の上に、また内容の上に、日本人側からの協力が行われているという喜ぶべきことである」とまとめている。雑誌を「堂々菊判二百二頁の大冊で、創作、詩、何れも現在の満州文学の最高水準を示すものであると言える」と絶賛したのだった。

三、『新京図書館月報』に關係する中国人文人の活躍

1 「芸文志派」とその文学

中国人作家のなかで日本語で雑誌に投稿する者が極めて少なく、珍しい。日本語に堪能な古丁はその知名度の高いこと及び「芸文志派」の活躍から、図書館編集の坂井艶司に頼まれ、1940年7月の43号に直接日本語による「僕達の“芸文志”に就いて」という原稿を寄せた。これは筆者が通読した本館報の中で唯一中国人文学者の手になる一文である。当時の「満洲国文壇」において、中国人、中国語による文学は如何なるものなのか、彼らの文学主張は何なのかを理解するには、この古丁の短い文章が恰好の窓口と言えよう。

古丁は自分を含めた仲間たちが文学を目指しているのが「何よりも、僕達は夢を持っているから文学の有り難さが分かるような気がする」としている。現時点で自分たちが出された二輯の『芸文志』は「何処へ出しても恥ずかしくない」としながらも、「決して満足していない。寧ろ絶えず不満足を感じているのであって、よりよきものを作ろうと自らを励ましているのである。〈不知足〉は僕達の民族の〈知足者常楽〉という箴言に背くものである。僕達は〈不知足者常楽〉という箴言をでも創って見たいものだ」と絶えず努力する姿勢を明示している。〈不知足者常楽〉について解釈すると、自分たちがこれまで納めてきた成績に満足せず、常に向上心をもって、文学を極めたいということではないだ

ろうか。

文芸雑誌『芸文志』のほかに、『読書人』（筆者未見）、『読書文庫』（筆者未見）の出版も手がけ、盛んに文学活動をしていたことがわかる。

しかし、当時の「満洲文壇」は、複雑な状態を呈していた。中国人による文学は派閥間で熾烈な文学論争を繰り広げていた。古丁をはじめとする雑誌『芸文志』に所属する一派は、首都の「新京」を拠点にして、ひたすらに「書く、印刷」することを唱えていた。このような創作に没頭する態度は、「奉天」の雑誌『文選』⁴に集まった文学者から批判された。中国人文人間の論争は当時の「満洲文壇」に影響を与え、日本文人にも注目された。『新京図書館月報』にも反映されている。

大内隆雄は第38号（1940年1月225頁）の「満系の文学回顧」で、1939年における「満人」文学者による文学の纏めを試みた。当時は中国語字による文学の雑誌に『新青年』と『芸文志』があった。なお、奉天（現在の瀋陽）にまもなく『文選』が誕生することに触れ、「これらには満系作家の殆どが寄稿することになっている」と明言した。

論文の後半に以下の一節がある。当時の文壇状況から、中国人文人同士の齟齬が感じとられる。

いま満系作家は「写印主義」ということを言っている。写は書く印は印行するである。とにかく書いて発表することが大事だというのである。この主義によって旺んに書かれつつあるのが現状である。斯うした動きは今後愈よ旺んになって行くであろうと思う。ただ私などから見れば、もっと批判があつてよいのだと思う。批判をすると直ぐ喧嘩になるというような初期的な段階はもう卒業にしたい。しかし一部に理由もない漫罵的批評が行われているのは事実で甚だ遺憾である。

上記の「写印主義」は実は「芸文志派」の古丁が最初に提唱した創作精神であり、同人たちはほぼこの創作ルールに賛同し、黙々と創作に励んでいた。しかし、この精神に対しては、後に形成された『文選』派に集まる同人たちから手厳しく批判され、文壇では盛んに論争が繰り広げられた。大内隆雄はこの論争を傍観者として私などから見れば、もっと批判があつてよいのだと思う。批

判をすると直ぐ喧嘩になるというような初期的な段階はもう卒業したい。しかし一部に理由もない漫罵の批判が行われているのは事実で甚だ遺憾であると評論したのだった。論争の激しさから、一部は感情的になっていることを暗に批判したのである。

2 中国人作家の作品はどう読まれているのか

中国人作家の作品がどう読まれているのかについて、満洲在住の日本人小説家秋原勝二は「満人作家小説集 第二輯 蒲公英」(1940年9月45号)という題の文章で感想を述べている。彼は小松の「蒲公英」を読んで非常に感動したことを記しながら、全体の作品は「類似性が感じられ、倦怠をおぼえる」。具体的に「どれ一つとして、例外なく苦しい、苦しい、作品ばかりでもある。重苦しい生活、とりかえしのつかない、傷ましい運命。作者たちの眼が一樣に、こうしたものばかりに釘づけになっているのは、哀しいことである」と指摘した。何故中国人の作品にはこの要素が強いのかについては、秋原は翻訳者の大内隆雄に原因があるのではないかと言っている。翻訳者の大内隆雄の素材選びとも関わりがあるだろうが、中国人作家が置かれていた社会状況、彼らの生活環境などの要因を考えると、ほかにも原因があるはずだと考えるべきである。この点に関しては彼らの作品を熟読してから、篇を改めて論を展開することにしたい。

翻訳者の大内隆雄は新人の創作にも目を配っている。1941年10月の55号に「満系作家の新人について」を寄稿した。古梯、劉漢、姚遠の三人について作品とともに紹介した。紹介の経緯はおなじみの「芸文志派」の重鎮である古丁と爵青の推薦だからだという。古丁たちの先輩作家による若手の成果とその名を広めてもらおうとの苦心が感じられる。ただ、新人たちの作風は「これまでの作家たちと似たようなものである。同じ流れに沿っていると言える。もう少し違った種類が出ることをも望む」と期待をかけている。

このような中国系作家や作品の紹介は太平洋戦争勃発後に館報から消えてしまった。一方、戦争後期になると、時局に迎合する書物の宣伝や紹介が多数見られるようになってきた。この時点から館報だけからは、中国人作家の動向や彼らの創作活動を知ることが出来なくなった。

四、中日文人の心象風景は如何なるものなのか

以上のように日中の文人が『新京図書館月報』を拠点に、どのように活動してきたか、彼等の投稿などを通じて、見てきた。日本が中国を侵略し、はじめて図書館を建設するようになってからすでに、長い月日経った。大連で1907年に満鉄が図書館を建設して、百年以上が経過した。日本が植民地に近代的な図書館を建設したのは、国策のためである。植民地の統治政策を図書館という機関を通じて、社会に貫徹しようとしていた。勤務していたライブラリアンたちが図書館でしたこと、見たことを分析することによって、彼等の心象風景がみえる。しかし、被統治者の中国の文人達が呈していた心象風景は言葉の表面においてだけでは容易に理解することが難しく、もっと複雑なものである。

1937年は中日全面戦争に突入した、歴史の上では大変重要な一年である。一方、「満洲国」の成立から5年間の歳月が経ち、日本人主導の植民地国家は、国作りの各制度を整えつつあった。特に文化統制の一環として、図書館の建設が急務となってきた。この年の年末に旧満鉄図書館は一部を除き、国の管轄下に置かれるようになった。新京図書館はこのような情勢の下で、また一国の首都の図書館として、「国」の使命を背負いながら、スタートを切ったのであろう。筆者が考察したのはまさに図書館建設が急ピッチの時期だと言える。図書館員の構成から、館報の充実度まで少しずつ改善していき、ハイレベルを目指していたのだと感じられる。特に文化や文学に関する評論は時には厳しく、時には揶揄的になり、文壇の先駆的存在である評論家や作家を起用しながら、上手く館報を盛り上げ、レベルアップさせた。特に図書館の様子を記載した雑文は面白かった。何気ない日常のようであったが、あの特殊な時代に人々はどのような気持ちで知識に憧れ、図書館はどのような仕組みで本の貸し出しをし、読者はどのように利用していたのかを、垣間見ることができた。日本人の読者たちは、様々な思いで渡満し、図書館で自分の人生を演じた一コマを披露した。これはすべて図書をこよなく愛したライブラリアン達の眼で確認し、活字を通じて残してくれた。一種のライブラリアン魂のような何かが伝わってきたような気がした。

一方、中国の文人は図書館報に直接登場することが極めて少なかった。これには恐らく様々な原因が考えられるだろう。筆者が考えるには、まず、館報は

図書館の様々な事務的な報告以外に、国策の宣伝、時局に合わせた評論を掲載する使命を担っている。この使命を遂行するのが部外者とされる中国人文人ではなく、図書館業務に携わっていた図書館員であろう。二番目は言語の問題だろう。図書館報は日本語で発行されていたため、「五族協和」を唱えている「満洲国」では、日本人以外の関わりは極めて難しいことであった。三番目には、文人の政治的な立場が要求されるからだろう。要するに、国家の正当な思想に沿った発言を求められ、多くの中国人文人の参加が憚れることは容易に想像される。唯一中国人作家として、館報に投稿した作家古丁でさえ、大物館員の推薦によって発表されたのであるから、他の文人達の参与はなおさら難しいことだったのであろう。

おわりに

「満洲国」に来ていたライブラリアンは多くの日本人と同じく新天地の満洲に憧れ、新しい「国家」に幻想を抱きながら、渡満したにちがいがなかった。国策に沿った仕事をこなし、一生懸命に図書館事業に貢献したと言えるだろう。しかし、彼等のはるばる日本から満洲に渡って「五族協和」を唱える新国家を目の当たりにしたときに、どのような思いを抱いたのだろうか。「満洲文化」を論じたりする際にも、他の日常的な発言からも、日本人には支配民族の優越感がどっぴりと出ていたのではなかろうか。国家の政策を擁護した彼等はやがて、敗戦を迎える。図書館事業に青春を捧げる思いは志半ばで挫折してしまう。彼等にとっては「満洲国」とは一体何だったのか。一ライブラリアンとして何を考えていたのだろうか。「満洲国」の存在はすでに80年前の往事となってしまったが、戦争の責任、特に植民地の文化に与えていた負の一面についての言及が少ない。図書館界においても同じく曖昧にされてきた。残念ながら、図書館員による回想はまだ見つかっていない。

一方、「満洲国」の図書館報から、中国人文人の心の有り様、心象風景を探ることはやはり限界があることが分かった。国策に深く関わった図書館報に意思表示することは難事であった。しかし、わずかな投稿や日本人による評論などを通じて、生存条件の悪い環境のなかで、彼等の逞しく生きようとする姿、彼等しか理解出来ない、彼等しか書けない「満洲」社会の暗黒部を透視することによって、心から滴れてきた血と涙こそ、彼等の本当の心象風景であると筆者

は理解した。

今後は図書館報の欠号の発見に努め、植民地時代の図書館にまつわる新たな問題、そこを舞台とする文人達の本当の姿に迫っていきたいと思う。

注：本論の一部は拙論①『新京図書館月報』からみる「満洲国」時代の文化（『文藝論争』第79号 2012年10月）②「新京図書館」のライブラリアンたちの記録（一）（『文藝論争』第80号 2013年3月）に基づき、改編、加筆したことを記しておく。

参考文献：

- 1 長春図書館 HP <http://www.lib.cc.jl.cn/>
- 2 岡村敬二著『「満洲国」資料集積機関概観』（社会評論社 2005年）
- 3 冷綉錦著『「満鉄」図書館研究』（遼寧人民出版社 2011年）
- 4 冷綉錦著「満鉄的“満洲”経営与附属地各図書館」（『外国問題研究』2009年第1期）
- 5 李娜 王玉芹共著「満鉄図書館的職能及其在東北的侵略活動」（『日本学論壇』2008年第3期）
- 6 岡田英樹著『文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版 2000年）
- 7 岡田英樹著『続 文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版 2013年）

注

- 1 加藤一夫、河田いこひ、東條文規共著『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』（社会評論社 2005年）、14頁。
- 2 文学同人雑誌。隔月刊文芸同人誌。1932年10月～1942年12月（55輯）廃刊。大連で『文学』名で創刊、三輯（33年4月）より『作文』と改題、16輯（35年12月）のみ『一家』と改題、次輯で『作文』名に戻る。発行所を奉天に移そうとするが、当局の許可が得られず廃刊。発行人は青木実、編集人は安達義信、21輯以後は渡辺淳（秋原勝二）、55輯は小杉茂樹。当初は文学愛好家の自作発表の場でしかなかったが、次第に「満洲」を意識した創作がなされるようになり、200部だった発行部数が廃刊時は2000部となるなど、「満洲」を代表する文学雑誌となった。64年に日本国内で復刊（貴志俊彦 松重充浩 松村史紀編『20世紀満洲歴史事典』2012年12月、300頁）。
- 3 1939年に『満洲浪漫』が創刊された。北村謙次郎（1904～82）をはじめ、主要な執

筆者は長谷川濬、長谷川四郎、横田文子、大内隆雄、木崎龍、竹内正一、檀一雄、矢原礼三郎、日向伸夫、逸見猶吉、青木実、吉野治夫、北尾陽三、坂井艶司、筒井俊一、鈴木啓佐吉など。ロシア作家のバイコフや中国人作家の田兵、疑遅、石軍、また王則や袁犀のような抗日的な作家をも積極的に紹介。

- 4 1940年梁山丁が瀋陽で“文選刊行会”を創建した。同人誌『文選』を発刊した。同人には王秋蛩、袁犀などがいる。梁山丁は『文選』の発刊誌で「現在の文学は群衆を教育する武器であり、現実を認識する道具である。我々は現実から避けることはできない」と強調した。古丁をはじめとする「芸文志派」との主義、主張と真っ向から対立していた。

